

問四 古文の読解

本文の現代語訳は、おおよそ次の通りです。

＜妻は心がまっすぐな人物で、「私たちは商売をして過ごしているので経済的に困っていない。この袋の持ち主は、どれほど嘆き悲しんでこの袋を探しているでしょうか。気の毒なことです。持ち主を探してお返し下さい。」と言ったので、(夫も)「その通りだ。」と思って、広く世間に知らせたところ、落とし主という人が出て来て、袋を返してもらいとても嬉しくなって、「お礼に、銀貨を三つ差し上げます」と言って、まさに分けようとした時に、考え直して、言いがかりをつけるために、袋の主が言うには「落としした時には、銀貨は七つあったのに、六つしかないのはおかしい。一つかくしましたか。」と言う。夫は「そんなことはない。最初から六つでした。」と議論をしたが、とうとう国の長官のところで、これを判定させることになった。国の長官は、眼力が優れていて、この落とし主はうそつきであり、夫は正直な者だとは思ったが、やはりはっきりしなかったため、妻を呼び出して、別の場所で詳しい事情を聞いたところ、夫が言っていることと少しも違わない。この妻は極めて正直な者だと見定めて、落とし主が不実であることが明らかになったので、国の長官が判決を下したことは、「このことは、はっきりとした証拠がないので判断が難しい。ただし、落とし主も、拾い主もどちらも正直な者だと見えた。拾った夫妻は、また言い分が違っていない。落とし主の言うことも正直だと思われるので、七つある銀貨を改めて探して、自分で取り戻すとよい。これは六つなので、別の人のものであろう。」と言って、六つとも夫妻にお与えになった。宋の人々は、立派な判決だと、国中で声を大にしてほめた。＞

【古文の通釈】

ようやく宵も更けていき、四更の空と思われる頃、十九、二十歳ぐらいの女性が、幼子を抱いて急にやって来た。「こんな人家も遠い所へ、女性の身で、夜更けに来るはずはない。どう見ても化け物であろう」と、油断がならないと用心しておりましたところ、女がちょっとほほえんで、抱いていた子に、「あの人は父親でいらっしゃるよ。行って抱かれなさい」と言って、突き出す。この子がするすると来たので、刀に手をかけて、ぐっとにらみつけると、そのまま戻って母親に抱きつく。(母親は)「構わないぞ、行きなさい」と言って突き出す。もう一度にらむとまた戻る。このようにすること四、五度で、うんざりしたのか、「よしそれならば、自ら参ろう」と言って、例の女性が、挨拶もなく来るのを、おじけづくことなく抜き打ちで、ばさっと切ると、「あ」と言って、壁を伝い天井へ上がる。

明けていく東の空が白っぽくなってきたので、壁に丸見えになっている貫を踏み、桁などを伝い、天井を見ると、爪の先の長いこと、二尺ばかりの女郎蜘蛛が、頭から背中まで、切りつけられて死んでいた。人の死体があって天井も狭い。ああ、誰の形見だろうか。また連れていた子供に見えたのは、五輪塔の古びたものだった。おおかた思うに、化け物と思って気があせりつつ、五輪塔を切れば、莫邪の剣もあるいは折れ、あるいは刃もこぼれてしまうだろう。そのときをねらって人を捕らえたのであろうか。うまい企てであることよ。この人も心があせて、身も勇めば、不本意ながら落ち度もあっただろう。思案して五輪塔を切らなかったのは、ああ、幸運な人であることだ。